



日本聖書協会「聖書図書館」が青山学院大学に移管されることになりました。今回、青山学院では「聖書図書館」開設と宗教改革 500 年を記念して、ルター訳「旧約新約聖書」(16 世紀複製)を中心とした聖書展と、28 日に「聖書翻訳の歴史」の講演会を、ガウチャー記念礼拝堂で開きました。両親の母校が、「聖書図書館」を持つとはなんとという喜びでしょう。現在青山学院はクリスチャン・スクールではありますが、神学部はありません。1882 年(明治 15 年)美以(メソジスト)神学校が開学の礎であったことを思うと、とても残念です。世界でも有名な貴重な聖書を持っているだけでは、聖書は飾り物にすぎません。聖書を読み、告げる人が、必要でしょう。

ガウチャー記念礼拝堂のロビーの一角が展示コーナーでした。複製とは言え、紀元前 1 世紀ごろの死海写本を始め、旧約聖書を 1 世紀にまとめて原本としたギリシャ語の「70 人訳聖書」があり、オリジナルの中世のラテン語聖書、ギユツラフ訳「約翰福音之傳(ヨハネ伝)」など、珍しいものから、現代にいたるまでの貴重な文献である 40 冊の聖書の展示がありました。食い入るように見てしまいました。

「聖書翻訳の歴史」について島先克臣氏(日本聖書協会翻訳部主事補)がお話してくださいました。とても親しみやすく語りかけられました。世界には196の国がありますが、言語は6900と言われています。日本では方言はあるものの1言語ですから、いかに多くの言語があることか、と驚いてしまいます。聖書協会はそれに対応して、2500 言語以上もの聖書を発行しているということです。聖書は世界的広がりを持つ本であることに驚きます。それは翻訳という働きなしにはありえないのです。

翻訳というと、カズオ・イシグロ氏のノーベル文学賞受賞に喜びましたが、英語の作品ですから、日本人は簡単には読みこなせません。翻訳者土屋政雄氏の出番となります。全く違う言語を正確に置き換えることはできないでしょう。作者の真意、スタイル、個性など、生きてこなければなりません。

聖書の翻訳も同じことが考えられます。島先氏は「神はアブラハムには古代バビロニア方言のアッカド語で、モーセには古典エジプト語で、ダビデには南ヘブライ語で、語りかけられただろう」とコーモアを持って話されました。それらの言葉がアラム語へ伝承されました。アレキサンダー大王時代から世界の言語はギリシャ語に代わり、「神はパウロにはギリシャ語のコイネーで語られたでしょう。」その頃ヘブライ語を理解できないユダヤ人のために、72人の人々が 72 日間でギリシャ語に翻訳して、旧約聖書の原本となる聖書が誕生しました。さらに、ローマ帝国によりギリシャ語はラテン語へと変遷したこと等、聖書は翻訳を繰り返して、語り継がれているということです。イスラム教ではコーランを一字一句変えてはならないためにアラビア語以外のコーランはないとのことです。

なぜ聖書が翻訳されるか、それは「愛の神は聞く人に分かる言葉で救いを語る」からだと言われました。母国語、分かりやすい言葉で読み、聞くことが出来れば、誰でも、愛の神の御心を知り、救いの喜びを感謝し、生きる力を得られるからです。2018 年 12 月に新翻訳事業による「聖書 聖書協会共同訳」が刊行予定とのことです。聖書協会はより良い日本語に翻訳する努力を重ねています。



聖書言葉は多くの言語の変遷を経て、私たちに語りかけています。聖書を読む時、信仰を伝えたいと願った人の真実さに触れたいと思います。何よりも、見えない神が見える像となったイエス様の真実に触れることが、聖書を読み、聞く、最大の喜びです。ルターは、ラテン語からドイツ語に翻訳したことによって、「母国語への翻訳は、すべての人に、開かれた教育と言葉の習得による主体的な人間の形成をなした」(小田部進一氏)と高く評価され、世界は一変したことも事実です。20 年ほど前に、私たちはルターが「95 か条の提題」を貼りだしたヴィッテンブルグ城教会の扉の前で、記念の写真を撮りました。